



Title	高瀬切追考 : 伝慈鎮筆『法印珍誉集』とその本文
Author(s)	海野, 圭介
Citation	詞林. 2013, 54, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67659
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高瀬切追考

—— 慈鎮筆『法印珍誉集』とその本文 ——

海野 圭介

一 法印珍誉とその家集

法印珍誉は、『吾妻鏡』にその名が見える宿曜師で、歌人として高名であったとは言えないものの、統群書類従に「珍誉法印和歌」として纏まった家集が収められたため、早くよりその経歴や事跡をめぐって検討が重ねられてきた人物の一人である。その世系については、井上宗雄による基礎的検討^①の後、兼築信行によって、平教成・基綱・家能などの遠祖から、珍也・珍賀・珍耀といった珍誉の父祖世代以降の宿曜師歴代の活動が辿られ、珍誉自身についても『吾妻鏡』の関連記事を集成し、それを読むことで鎌倉幕府との関係（幕府の祈禱を行っている）を含む閥歴が一覧されている^②（また、宿曜道研究の側面から山下克明、戸田雄介による検討がある^③）。

その家集である『法印珍誉集』（珍誉法師愚詠）についても、同じく兼築信行により関連資料が博搜されており、全二十五首からなる掌編の家集の現存伝本四本（次掲①～④）はいずれも同系統であり、附された奥書の記述などより、「慈鎮」

を伝称筆者とする古写本を祖本としたであろうことが指摘されている。

① 島原市立図書館蔵松平文庫本『法印珍誉愚詠』（一三五―五〇）〔江戸前期〕写 一冊

② 宮内庁書陵部蔵『法印珍誉愚詠』（一五五―七六）〔江戸前期〕写 一冊

③ 統群書類従（巻四四四）「珍誉法印和歌」〔江戸後期〕写 一冊^④

④ ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫本『法印珍誉愚詠』（c三三）〔江戸後期〕写 一冊^⑤

加えて、現存本との関係が注目される伝慈鎮筆高瀬切と称される古写断簡が紹介され、さらにはその親本として高松宮伝来の古筆手鑑^⑥に押される委細未詳とされた家集断簡（伝藤原家隆筆、〔鎌倉中期〕写）が見出され、高瀬切三点（写真による確認を含む）と伝藤原家隆筆家集切四点（同）を集成した上で、その資料的意義などについても詳述されている^⑦。

二 「法印珍誉集」と高瀬切

『法印珍誉集』の伝本のうち、前掲の①島原市立図書館蔵松平文庫本『法印珍誉愚詠』（二三五〇）の巻尾には、「這集以慈鎮和尚真跡不違一字令書写即座校合了」の奥書が記されており、また、③統群書類従（巻四四四）「珍誉法印和歌」の末尾④ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫本「法印珍誉愚詠」にも「本書慈鎮和尚筆、右鹿島貞吉本書写文化六己巳春」とあり、いずれも「慈鎮和尚真跡」（あるいは「筆」）本による転写とされている。

①③④が基づくとする②宮内庁書陵部蔵本には奥書が記されないが本文の状態から他と同様に考えてよいように思われる。「慈鎮」を伝称筆者とする一本とは、兼築信行により紹介された高瀬切と称され伝わる古写断簡にあたりと考えられるのであるが、現行の高瀬切は、慈鎮筆として伝来した卷子一軸を昭和十三年（一九三八）に分割したもので、その由来については、裁断に関わった古筆本家十三代・古筆了信によって次のような記録が残されている。

この切はもと、京都の名家角倉家に伝来した巻物であった。それを昭和十三年に数寄者が集つて十葉に分割した。その際請はれて角倉家が高瀬川を開鑿した縁故に因んで斯くは高瀬切と命名したのである。仏教に因みある悟りの歌が多い。

この了信の言通りに、卷子の状態で伝来していた時点での高瀬切原巻一軸の書影が、『野崎木村両家所藏品入札目録』（東京美術倶楽部一九三五）に「二二一 慈鎮和歌巻物」として掲載されることが、久保木秀夫から情報を得た兼築信行により確認されている。

三 高瀬切巻頭・巻軸と極札

古筆了信によつて十葉に分割されたという高瀬切は、従来次に示すbの伝存が知られていたが、この度、新たにa、cの二点の伝存の確認ができた。

a 個人蔵（春部四首（巻首）） 一軸（後掲図1）

b 兼築信行蔵（秋部六首） 一軸

c 個人蔵（雑部一首（巻軸）） 一枚（後掲図2）

aは「法印珍誉愚詠」の端作を含む巻首部分の四首で、春部の全歌にあたる。現在の装丁は、一文字に古織の竹屋町、中回しに金欄を用いた三段装。本紙は二十八・一×四十四・五種。紙質は楮紙。卷子の状態では伝来した時点で相当の巻皺が刻まれたようであるが、表具に際し無数の折れ伏せが施されており、現状では元来の料紙の状態（紙面の状態や疲労の度合いなど）が想像できないほどに整えられている。二重箱入り（箱表には何も記されない）。古筆了信の極札とともに古筆了雪（一六二二七五）の次の様に記す極札を附属する。

「慈鎮和尚法印珍誉愚詠一巻（印）」了雪札・表（蓋表に貼付られ

るため裏面未詳）

「慈鎮和尚（番匠松尾寄四百）」**〔琴山〕**（了信札・表）

「名葉 高瀬切（角法印珍誓詠寄物切）河の切跡にちなみて 己卯一廿八 **〔了信〕**」

（同・裏）

了雪の札には「慈鎮和尚法印珍誓詠」**〔卷〕**と記されることから、この極は卷子として伝来していた裁断前の高瀬切原巻の時点で附属されたものと知られ、分割にあたり巻首部分のaに附属されたと推測される。この極札の出現により、従来疑問とされていた「慈鎮」筆との伝称は、少なくとも了雪の時代（江戸前期）まで遡るものであったことが確認されたこととなる（従って、前述の現存伝本①③④の奥書に見える「慈鎮」の伝称はこの極によると考えられる）。

cは、巻軸の一首で雲母引の台紙貼り。極札は附属しないが、「慈鎮和尚 高瀬切／宿曜の／よ、をへて」と記す包紙を附属する。本紙は、二十八・一×九・二糶。紙質は楮紙。cはaに比べると若干色目の濃く見える茶褐色の紙色を示すが、これはaが表具の際に洗われたための差異と推測される。a、cの料紙を突き合わせると、aの料紙は光沢があり幾分硬質な印象を受けるのに対し、cは毛羽立ちの目立つ、打紙加工のあまい楮紙の紙質を示している。両者の印象は相当に異なるが、この相違はaの料紙が表具の際に整えられたため、紙質の印象が変化してしまったためと推測される（そのため、当該資料自体が近年の転写のような印象を受ける）。現在

知られる高瀬切断簡は、その何れにも筆線に墨の滲みが見て取れることから、元来はcが示すような表面加工の充分ではない料紙に書写されたものであったと考えられる。表具が施されていないcの存在は、高瀬切の料紙の状態を観察する上で貴重であると言える。

四 伝藤原家隆筆家集切と高瀬切

高瀬切は、高松宮伝来の古筆手鑑に押された伝藤原家隆筆家集切（註）に基づく転写と考えられてきた。新たな資料の出現した現時点でも、それは首肯されるように思われるが、両者の関係については依然詳らかではない部分も残されている。各資料を披見し現時点で明らかになったことなどを聊か注記して、今後の検討に備えたい。

伝藤原家隆筆家集切と高瀬切との関係を考える際に、前者が祖本、後者がその転写と考えられたのは、(1)料紙、(2)書風（（註）表記形態）の二つの要素によるところが大きい。

(1)料紙 先にも記したように、表具をかけた高瀬切の料紙は本来的な紙質とは異なる印象を受ける状態にある。前掲cの料紙の状態が本来の高瀬切の料紙の風合いを示しているとすれば、相応に時代の印象があり、料紙の視覚的観察のみでその書写年代を判断するのは難しい。

むしろ、両者を対比して改めて理解され、重要と思われるのは料紙の法量の一致である。高松宮伝来古筆手鑑所収の伝

藤原家隆筆切の料紙は、三〇・九×四三・〇種で、高瀬切と比べて二種ほど天地の丈が長い。しかし、高瀬切は上部余白が極端に狭く、また下部には文字が裁断されたと思われる箇所もあり、天地共に若干を裁断していると推測され、元來は伝藤原家隆筆切と同様に天地三〇種前後であったと思われる。両者の料紙の大きさはほぼ一致していると言え、これは、一方が他方を模写しようとしたための処置であったと考えられる（このことは表記の面からも確認される）。

(2)書風と表記形態 伝藤原家隆筆切は、法勝寺流の書風を色濃く伝える筆跡で書写されており、一見して浄書本との印象を受けるのに対し、高瀬切は、書風については法勝寺流のイメージを喚起しない。伝称筆者として「慈鎮」の名が付されるのも納得されるような、丸みを帯びた字形と墨を含んだ筆先の形を残すようなぼつぼつとした筆線の特徴とする書風を示している。

この印象の相違は、高瀬切書写者の書の技量の問題以上に、双方の料紙の差異に起因すると思われる。伝藤原家隆筆切は、打紙加工が施された料紙に書写されており、そのため線にハリがありシャープな印象を受けるが、高瀬切の料紙は打紙加工がなされておらず（あるいは打ちがあまく）、墨が滲みやすい。一般的に見れば、紙質や書風の点から見ても、高瀬切は草稿風であり、伝藤原家隆筆切は浄書本風であると言えるが、高瀬切と伝藤原家隆筆切の関係をどのように考えることはや

はり難しいように思われる。

両者の書写形態を比較すると、双方の一致は行取りや字母に留まらず、表記される文字の形や配置、また連綿の姿までもが酷似しており、一方が他方を忠実に模写しようとしたものであると判断される。能筆の手になると推測される伝藤原家隆筆切が、高瀬切の連綿までも忠実に模写する必然性は想定し難く、やはり、高瀬切が伝藤原家隆筆切の模写を試みたが、料紙の差異などにより結果として表現の相違が生じたと考えられる方が無理はないように思われる。

加えて、高瀬切には、重ね書きをする部分がある。第四番歌一行目の十四文字目「な」（図1参照）、第二十五番歌一行目十五文字目「け」（図2参照）は重ね書きされているが、これは文字を書き改めたというよりは、字形を整えているように見える。これを草稿風と見れば、そのようにも考えることもできるが、やはり模写の際の所為と見る方が納得される。

判然としないところは残るものの、高瀬切を伝藤原家隆筆切の模写と一応は考えた上で、更に問題となるのは高瀬切の書写年代であろう。両者の関係は、近世期に多く作成された古筆の模写のように、原本をそっくりに模写したものではない。高瀬切は「慈鎮」の伝称を伴うが、確かにその様に極められたとして違和感のない書風を示している。高瀬切の書写年代については、従来、室町期頃かと推測されてきたが、書そのものは無理のない慈鎮様の特徴を示しており、さらに遡

る時期の書写と考えてもよいように思われる（詳細についてはなお関連資料の出現を俟ちたい）。

五 高瀬切の全容

前掲の a には、古筆了雪による極札とともに、分割前の高瀬切の全巻を取めたモノクロの写真が添えられていた。恐らく昭和十三年の分割に際し、その姿を記録するために撮影されたものと思われる。鮮明な書影とは言いがたいが、この写真によって現在まで原本の伝存が知られていない箇所についても本文の状態を知ることが可能となった。先にも示したように、高瀬切は現行の『法印珍誉集』の祖本にあたると思われる資料であり、本写真により同集の和歌本文の問題には一応の決着がついたと考えられる。本稿の末尾に全体の書影を附載したので、併せて参照願いたい（図3参照）。

注

- (1) 井上宗雄・福田秀一「法印珍誉について、付寂身について」(和歌史研究会会報12一九六四・一)。
 (2) 兼築信行「珍誉とその世系」(国文学研究129一九九九・一〇)。
 (3) 山下克明「平安時代の宗教文化と陰陽道」(岩田書院一九九六)、戸田雄介「宿曜道の院政期―珍誉と慶算を中心に―」(佛教学大学院院紀要34二〇〇六・三)、同「鎌倉幕府の宿曜師―特に珍誉について」(同35二〇〇七・三)。
 (4) 原本は宮内庁書陵部蔵。『寂身法師集』と合綴。

(5) 『寂身法師集』『基俊集』と合綴。本文の状態から続群書類従の転写と思われる。

(6) 現在は京都国立博物館蔵。『御手鑑 高松宮御蔵』(貴重本刊行会一九八〇)に複製される。

(7) ①兼築信行「法印珍誉集」をめぐって―高瀬切の紹介から―(研究と資料41一九九七・七)、②同「高瀬切補説―法印珍誉集』の最善本は何か―」(研究と資料43二〇〇〇・七)。

(8) 兼築氏自身は、注7掲載の論文②でなお慎重な態度をとられているが、後述のように高瀬切には江戸前期の鑑定家・古筆了雪の極札が附されていることが明らかになったため、現存本の直接の親本は高瀬切と考えてよいように思われる。

(9) 古筆了信「古筆往来 慈鎮和尚高瀬切」(茶道236一九四一・二)。

(10) 注7掲載の兼築論文②。

(11) 注7掲載の兼築論文①、及び「古筆への誘い」(三弥井書店二〇〇五)七十七頁に書影がある。

(12) 注7掲載の兼築論文①参照。

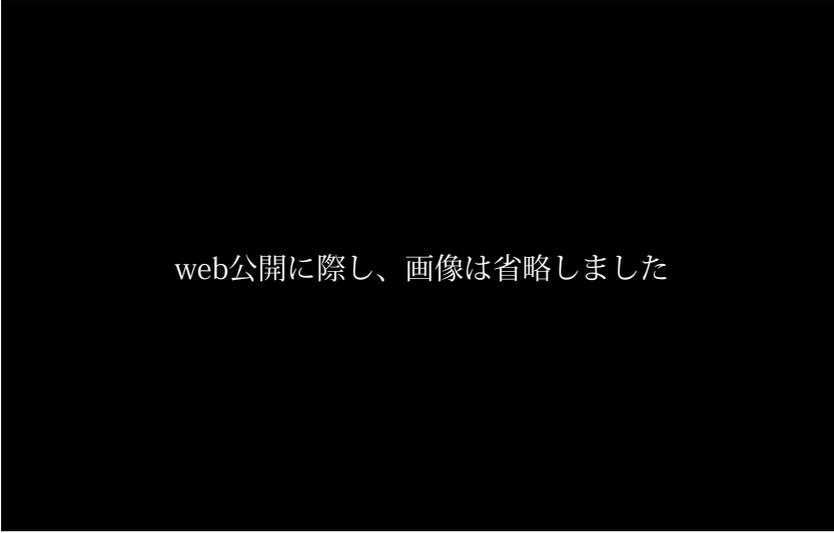
(13) 注7掲載の兼築論文①参照。

(14) 注7掲載の兼築論文①、及び注11掲載の「古筆への誘い」。

〔付記〕貴重な御所蔵資料の閲覧と利用をお許しいただきました個人所蔵者の方に篤く御礼申し上げます。また、京都国立博物館所蔵資料の調査にあたりましては、同館羽田聡先生にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

(うんの・けいすけ 国文学研究資料館

・総合研究大学院大学准教授)



web公開に際し、画像は省略しました

図1 高瀬切 春部4首〔巻首〕（個人蔵）

第2首1行目末尾「て」、第3首1行目末尾「る」は補筆。第4首1行目の14文字目「な」は重ね書きしている。図3の古写真に見える中央部分の破損は丁寧に補修されている。



web公開に際し、画像は省略しました

図2 高瀬切 雑部1首〔巻軸〕（個人蔵）

料紙の印象が図1とは異なる。毛羽立ちの目立つ打紙加工のあまい楮紙の紙質を示しており、墨の量の多い部分には滲みのあとが見える。なお、和歌本文1行目の左横に天地10cm程度刷り消しの跡のように見える毛羽立ちが認められるが、いかなる理由によるかは未詳。

web公開に際し、画像は省略しました

図3 高瀬切（全巻の書影）
高瀬切 巻首（個人蔵）に附属の古写真による。天地は切り詰められており、下端部分の一部の文字が欠けていることが確認される。
また、中央部分に点々と黒い部分があるが、これは料紙の破損箇所と推測される。

web公開に際し、画像は省略しました

web公開に際し、画像は省略しました

web公開に際し、画像は省略しました